令和８年度青少年グローバル共感キャンプ　参加レポート

報告者　阿部　カノン

青少年グローバル共感キャンプで印象に残ったこと

私がこの研修で一番心に残っていることは、海岸のゴミ清掃と自由時間です。ゴミ清掃では、済州島の自然を感じられて爽快でしたし、海岸を綺麗にできた達成感を味わうことができました。清掃でのグループのメンバーだった人が近くにあった山の名前を教えてくれたり、お互いのことを教え合ったり出来てとても楽しかったです。

自由時間では初日はぎこちなかったものの、日が経つにつれて数日前に出会ったとは思えないくらい仲良くなりました。一緒にコンビニに行っておすすめの食べ物を聞いたり、枕投げをしたり、楽しく語り合ったことはいい思い出です。互いの国の有名なパーティーゲームをして、似ているものもあればそんな風に遊べるのだということが分かり、感心させられたものもありました。

最初は、私は人見知りな性格なので、日本人同士でも仲良くなれるか心配でした。しかし、みんな優しく気さくに話しかけてくれたので、私もリラックスすることができました。私に伝わるように、言葉や表情、ジェスチャーで向き合ってくれたこと。それは、国を超えて友情が生まれた瞬間だったと思います。今でも時々韓国の友だちと連絡をしていますが、その中で文化や価値観の違いを感じることも多々あり、とても新鮮な気もちになります。しかし、それはまだ違いの一部にすぎないと思います。これからも新たな発見や気づきをしていきたいという気持ちを大切にしながら、文化の多様性を受け止められるように様々な価値観を身につけていきたいです。



沙渓海岸での清掃活動の様子



グループ対抗のゲーム大会の様子

青少年グローバル共感キャンプで学んだこと

私は、この研修に参加する前は自分の英語力で本当に意思疎通ができるか不安でした。第一言語の異なる人とコミュニケーションをとる上で、周囲に自分の意見が伝わらなかったり、相手の言っていることを理解できなかったりしたらどうしようと考えていました。恐怖心や恥ずかしさから、最初は言葉を発することを身構えてしまっていました。しかし、ワークショップやアクティビティなどを通し、新しい視点を手に入れました。完璧な文法や語彙力よりも相手の考えを理解しようとする姿勢、不器用ながらに自分の思いを伝えようとする気持ちが大切だと気づきました。実際に知っている語句をつなぎ合わせたり、ジェスチャーを使ったり、たまに翻訳を使いながらも必死に英語で話すことができました。必死に伝えようとすれば相手も真剣に聞いてくれ、逆に相手の言葉を真摯に聴こうとすることで、言語の壁を越えて強いつながりを生むのだと実感しました。

また、失敗を恐れて何も行動しないのではなく、不器用でもまず一歩踏み出すことの大切さを学びました。私はこの研修で「5日間一緒に過ごすけど、その後は離れ離れになる」と思って挑みました。そうすると、恥ずかしさやこう思われたらどうしようなどの考えを消し去って楽しむことができました。うまく話せないことや、相手からの印象を気にして動かなければ何も始まりません。今でも、あの時一歩踏み出していた自分に感謝しています。逆に、何も行動を起こしていなければ、今頃後悔していたと思います。自分から一歩踏み出し、伝えようと試行錯誤することが、相手との距離を縮める一番のカギだと実感しました。

これから、いかしたいこと

この研修を通して得た、完璧に話せなくても伝える努力と寄り添う心があれば意思疎通ができる、という実感は、私のこれからの大きな自信になると思います。今後は英語などの語学力の向上を目指すことはもちろんですが、それ以上に今回学んだ姿勢を忘れず、より広い視野を持ち、様々な人とのコミュニケーションに挑戦していきたいです。具体的には、日常の学習や学校生活において間違えることを恐れず、一歩踏み出すという実践を重ねていきたいと考えています。これまで完璧でないといけないというプレッシャーを感じ、自分から行動を起こすことを躊躇していましたが、この研修を通し不完全であることよりも挑戦しないことの方を避けていくべきだと感じました。だからこそ、機会があれば積極的に参加していき、相手の意見を真摯に受け止めていきたいと思います。

グローバル化が進んでいるこの社会において、国籍や文化、考え方の異なる人々が集うことは当たり前になってきています。本当の意味で絆をつなぐためには正確な言葉遣いだけでなく、自分の思いを伝えようとする熱意と、相手の言葉にある背景まで理解しようとする誠実さが大切だと思います。

青少年グローバル共感キャンプを通して私はたくさんのことを学びました。この学びを今だけのものにするのではなく、これからの生き方にいかし、未知の世界に自ら飛び込んでいきたいです。